

私の出会った文豪

日本銀行総裁

黒田東彦

はるひこ

もし、文豪に出会えたら、皆さんはどうしますか？ 緊張で何も言えませんか？ 思い切って感想をぶつけてみますか？ 文学論を戦わしてみますか？ あるいは、「生身の作者なんか作品と関係ない」と天気の話でもしてみますか？ あるいは、あるいは……。

いつもの堅い日本銀行の業務のお話に替えて、今回は、ほぼ半世紀前の文豪との出会いについて黒田総裁の思い出話を皆さんに紹介しましょう。はたして大の読書家である黒田総裁と文豪との出会いはどのようなものだったのでしょうか。

作家や文芸評論家といった人たちとは全く縁のない社会生活を送ってきたが、不思議なことに、若いころ何人かの文豪に出会ったことがある。ほとんどが半世紀ほど前のことなので、詳細は覚えていないが、ごく一部を鮮明に記憶している。そのような思い出を記してみたい。

(敬称略)

最初に出会った文豪は、江戸川乱歩（一八九四～一九六五年）である。あれは、私が高校生のときなので、一九六二、三年ころだと思うが、東



江戸川乱歩（提供：立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター）

大の駒場祭に行つて乱歩の講演を聞いたのである。私は、家に隣接した東京教育大学附属駒場高校（現筑波大学附属駒場高校）に通っていたので、歩いて一五分ほどの東大教養学部のある駒場キャンパスには何度か行ったことがあった。駒場祭のプログラムに乱歩が来て講演するというのを見つけ、推理小説ファンの私は、さっそく出かけたのである。

どの教室だったか憶えていないが、五、六十人は入れるくらいの部屋で、行ってみると、まだ数人し

か人が集まっていなかった。そこで待っていると、何と、主催者による特別の紹介もなく、あのベレー帽をかぶった乱歩が出てきて、いきなり講演を始めたのである。確か、変身願望に関する話だったように思うが、ぼそぼそと、しかし、印象深い実話だかフィクションだかわからないエピソードを小一時間話してくれたように記憶している。

もちろん、それまでに、乱歩の子供向けの「少年探偵団」シリーズのみならず、初期の「二銭銅貨」「心理試験」「D坂の殺人事件」から、「押絵と旅する男」や「目羅博士」なども読んでおり、乱歩は好きな作家の一人だった。ただ、どういふ人物かは知らなかったで、目の前の老人が日本における推理小説のパイオニアとは、なかなか信じられなかった。

次に出会った文豪は、石原慎太郎（一九三二年〜）である。一九六七年四月に大蔵省（現財務省）に入省してすぐに、新入省者に対する研修が葉山で行われたのだが、その教養講話の講師としてやってき



石原慎太郎と三島由紀夫（提供：文藝春秋）

たのである。私は、芥川賞を授与された「太陽の季節」しか読んだことがなかったが、どのような話をしてくれるのか、興味津々であった。そこに、サンダルを履いてラフな格好の石原慎太郎が現れたのである。

しかし、石原慎太郎は当時すでに政治に関心が向かい、「若い日本の会」の活動を経て政界へ進出しようとしていたときであり、もっぱら政治的なことを話してくれたように記憶している。そもそも、初めに同期の研修生がそれぞれの仕事を簡単に紹介した際にも、それを途中で遮って、日本の政治状況を憂える持論を滔々^{たうたう}と述べたのだった。したがって、残念ながら、文学的な話は聞けなかったのである。

私は、大蔵省入省時に大臣官房秘書課に配属され、人事や研修関係の手伝いをしていたので、翌年の一九六八年の新入省者に対する研修では、教養講話の講師として小林秀雄（一九〇二〜一九八三年）を呼ぶことになり、秘書課の上司とともに鎌倉の家を訪ねた。鎌倉

山の頂上付近にあった小林邸は、
瀟洒な日本家屋で、玄関から入っ
たところに広い応接間のような洋
間があり、そこで講師を依頼した
のである。

小林秀雄の文章は当時の大学入
試によく出題されていたので、い
くつかの評論は読んだことがあつ
たが、難解で怖い人のように思っ
ていたところ、大変ざつくばらん
な人で、快く講師を引き受けてく
れたことを憶えている。今になつ
てもっといろいろなことを聞いて
おけばよかつたのではないかと
思う次第である。

若いころ最後に出会った文豪は、
三島由紀夫（一九二五—一九七〇
年）である。やはり秘書課にいた
一九六七、八年ころだと思うが、あ
る大蔵省の先輩が新宿のアンガラ
劇場に連れて行ってくれたときの
ことである。当時、アンガラ劇場
で前衛的な劇を上演することが流
行っており、そこでは、三島由紀
夫の劇が上演されていた。一幕の
短い劇だったが、終了したところ
で、会場の一番前にスポットライ



三島由紀夫（提供：藤田三男編集事務所）



小林秀雄（提供：文藝春秋）

トが当たり、花束を抱えた三島由
紀夫が舞台上上がって主演者にそ
れを渡すのを見たのである。

私は、「仮面の告白」や「金閣寺」
から、「鏡子の家」や「英霊の聲」ま
で、三島由紀夫の著作をほとんど読
んでいたが、三島本人を見たのは、
そのときが初めてだった。一六〇
センチそこそこの身長のようにだつ
たが、ボクシングやボディービル
で鍛えた筋肉質の体躯に短く刈つ
た髪が印象的だった。しかし、そ
の印象は著作から受けるものとは
全く異なっているように思われた。

一九六九年から一九七一年まで
の二年間、私はオックスフォード
大学に留学したが、一九七〇年
十一月のある日、カレッジの大学
院生寮で大きなどよめきが起こり、
南アフリカからの留学生が「三島
由紀夫がハラキリをした」と泣き
叫んでいた。この白人の留学生は、
映画は大島渚、小説は三島由紀夫
の大ファンだったのである。私も
呆然として声もなかったことを憶
えている。帰国した後、「春の雪」
に始まる「豊饒の海」シリーズを読
み、深く感銘を受けた次第である。

■ ■ ■

その後は、文豪には全く縁がなかったが、一九八四年から八六年まで三重県に出向し、その際に親しくなった人から紹介されて、吉村昭（一九二七～二〇〇六年）に何度か会ったことがある。吉村昭の短編やエッセイはたくさん読んでいたが、「戦艦武蔵」や「破獄」など評判の高い長編は読んでいなかった。あまり著作のことは聞かなかった。一度などは、大勢の人たちとともに吉村昭と夫人の作家津村節子（一九二八年～）を囲んで食事をしたこともあるが、やはり、著作のことは聞かず、ごく世俗的なことしか話さなかったように思う。著作から、謹厳な人のように思っていたが、きわめて人ありの良い、優しい人であった。

■ ■ ■

一九九三年から九四年まで大阪国税局長として関西に赴任していた折、ある会合で司馬遼太郎（一九二三～一九九六年）を見かけたことがある。にこやかな表情と見事な白髪の司馬遼太郎の周りには人だかりがしていて、私は近づ



司馬遼太郎（提供：司馬遼太郎記念館）



津村節子と吉村昭（提供：津村節子、撮影：齋藤康一）

■ ■ ■

けなかった。私は、「竜馬がゆく」「坂の上の雲」「翔ぶが如く」のようなベストセラーにはあまり関心がなく、「ペルシヤの幻術師」「果心居士の幻術」「空海の風景」などを愛読していたので、こうした著書について尋ねたかったのであるが、果たせなかった。これは、今でも残念に感じている。

■ ■ ■

このように文豪との出会いを振り返ってみても、私は、よくよく文学的な交流には縁遠いようである。純文学では、森鷗外、夏目漱石、芥川龍之介、谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫などが好きであり、推理小説では、岡本綺堂、江戸川乱歩、横溝正史、戸板康二、泡坂妻夫、連城三紀彦、島田荘司、北村薫、京極夏彦、宮部みゆき、東野圭吾などが好みで、ずいぶん読んだものだが、著作を読むことと作家に会うことは全く違うことなのだろう。私にとっては、著作を読んでも感銘を受けることが最も大切であるが、作家に会って作品に対するイメージに変化が生まれることも、また楽しみである。